# 富士門流の血脈観

## （阿部発言と貫首無謬・絶対論の過ち）

廣田頼道

### 一、序

大石寺側の僧俗は、今日の混乱に至る流れの当事者でありながら、今だに

○貫主絶対（貫主が現代の日蓮大聖人である。貫主の判断にかなわなければ謗法である。）

○戒旦絶対（戒旦の本尊が存在する所こそが正しく、戒旦の本尊に御目通り出来ない者は、血脈が切れ、成仏出来ない。戒旦の本尊に、日蓮大聖人の全てが納まり、森羅万象の事物が消滅したとしても、戒旦の本尊は消滅しない。消滅すると思う者が謗法である。）

この二つの考え方にしがみつき、しばられているのであります。

しかし、この二つの考え方は、日蓮大聖人の御書の中には無く、御法門の根本に存在するものではないのであります。七百年の歴史の流れの中で水垢が生れるように、まったく日蓮大聖人の御心、妙法よりかけ離れた、大石

寺の組織や、貫主の権威権力を守る上で安易で便利な方法の上に生れた、迷信として、今日の大石寺に鎮座ましましている妖怪なのであります。

今ここでは、本来の血脈と、その源は何かということを明確にし、貫主絶対。戒旦絶対が、いかに意味のない珍腐な考え方であるかということを明し、多くの人々に良く考えて貰いたいと思うのであります。

当然、このことは、今日、正信覚醒運動の道を歩んで来た、私達自身も、実はかって、この二つの迷信の虜であったとの、反省に立った上でなければ、示せない事なのであります。

私達は、阿部貫主の信仰者としての姿勢に疑問を持ち、裁判にのせて貰いやすいことを考えて、阿部貫主の日達上人から相承があったと主張する事に関して、まったく立証する人が誰もいない闇の世界で、不審があるということから、阿部貫主が主張する昭和五十三年四月十五日に相承があったかなかったかを争点として地位不存在の訴えを裁判所へ起しました。

しかし、本当に問題とすべきは、阿部貫主に、もし、日達上人より明確な証人のある相承が行なわれた事実があったとしても、阿部貫主の信仰姿勢は、自分の地位名誉、政治的判断を絶対として、日蓮大聖人の御法門からはるかに外れる信仰失格者であるということであります。

相承がもしあったとしても、我々は、日蓮大聖人の御法門を守護する行動を取らなければならなかったのであります。

つまり相承が有ろうが無ろうが、誤っている者は、信仰者でも無く、貫主でも無いのであります。

この意味から、あの訴えを起す時、多くの僧俗が、貫首を訴えるか否かの書面に、著名捺印の決断を下さなければならなかったことは、それ迄引きずって来た永年の迷信である貫主絶対と戒旦絶対の理屈を真正面から、自からに問い直す、有意義なことであったと思うのであります。

今迄、この二つの絶対を、信徒や、他宗の人々に全智全能の魔法の杖の様に振廻して来た自分達自身が、これらのことから離れて、本当の日蓮大聖人の心（仏法）とはなんなのだろうかと、大きな岩石をどんどん砕いて行って原子の世界に至る様に、我々も全ての鎧を脱いで、赤裸になって、何も自分の地位や名誉も無い、ひ弱で愚かな、末法の一人の荒凡夫として、成仏する為、真実の仏法とは何んなのかという、貫主も、大石寺も、戒旦本尊

も存在していなかった時点に心を置いて、日蓮大聖人の血脈法水とは何んなのかを考えなければいけなかったのであります。そのことが結果的に出来たということが、逆に、私達の幸せであったと、今日心底から思えるのであります。

## 二、何んの為に仏法があるのか

およそ仏法というものが何んの為に、この世の中にあるのかといえば、それは一切衆生成仏の為であります。釈尊の出家の理由が、生老病死を、心の内に乗り越えられる法を求めて――であることを静かに考えれば、誰でも理解出来ることであります。

又、私達が朝夕読経する法ケ経の御文にも「阿耨多羅三藐三菩提」という語句があります。まさしく、仏は、私達の億劫の辛労（永遠の時の流れの中での一番の艱難辛苦）とは、成仏することが出来ないということこそがどんな貧乏や、病氣、家庭不和という、一般凡夫が一番の辛労と思い込んでいることであっても、成仏出来ない苦しみから見れば、それ等は苦しみとは言えないと、仏は言うのであります。この視点に仏と凡夫の違いをありありと感じるのであります。病気直しや、貧乏直しの為であるならば、仏はこの世に出て来る必要はなかったのであります。一切衆生を成仏させ、仏と同じ生命、心を自覚せしめる為に、一大事の因縁として、衆生に「仏知見を聞かせ」「仏知見を示し」「仏知見を悟らせ」「仏知見に入らしめる」〈仏知見とは仏の智恵、つまり仏界のこと〉（方便品）為に生れて来たのだと説示されていることでも分るのであります。

日蓮大聖人の仏法も同様に、現世利益の為でなく、成仏の為にあるのであります。

世の中の人々は、宗教は何れも同じだと見ていますが、たとえば、キリスト教や浄土宗は、天国や浄土、極楽を最上と考え、この国土と別に、そこがあると考えます。キリスト教では、天国に召され、神の下僕になることが、仏教で言う成仏と説いているのであります。釈迦、大日如来を拝む者も、観音、弥勒、薬師を人格と拝して拝む人々も、その仏菩薩が持っている法力が何かを考えることもなく、その名を唱え、自分自身の悩みを解消する手段としているのであります。成仏を大願とわきまえることが、それらの宗旨には出来ないことなのであります。これでは、宗教はどれも同じなどではなく、どれもバラバラでどれほど信仰しても、仏と同じ、成仏の境界を得

ることは出来ないのであります。

仏は、一切衆生に、仏と同じ心、生命を持ってもらいたい。自分と同様に悟りを得てもらいたいことを願われて、この世に現われ、出世の本懐として、一切衆生が成仏出来る法を、妙法連華経と示し、表わしたのであります。

世の中の宗教全般、仏教と呼ばれているものであっても、神、仏と衆生の差別区別を当然のこととして説き、神仏と等しくなるという、当り前のことさえ説いていないものが大勢なのであります。

このことを指して、釈尊は法華経を説くにあたって、自からの爾前経も含め「四十余年未顕真実」と断じているのであります。この経文中の「真実」とは、成仏の直道、成仏出来る道理を持った法は説かれていないということなのであります。

法華経には、自から「已今当説最為難信難解」（法師品第十一）と示し、過去、現在、未来の説法の中において、法華経に勝る経はない。何故ならば、成仏を遂げるという大願を、この妙法蓮華経に説いたならば、この教え以上の教えを説く必要もなければ、説くことも出来ないという、釈尊の思いが、ここに表わされているのであります。

日蓮大聖人が「妙密上人御消息」（全1239P）に

日蓮は何の宗の元祖にもあらず、又末葉にもあらず

と、明言されているのも、一切衆生成仏の法を個有の宗派の個有の法とするべきものではないし、一切衆生成仏という宗教の大願であるはずのものを日蓮の所有物とすることの愚を明示しているのであります。

この様に考えて来ると、釈尊も日蓮大聖人も、法も、信仰、修行、寺院、僧侶（手継ぎの師）の存在、貫主、血脈、戒旦の本尊、法華経、御書、法水……等々、全ては、私達が成仏する為の指標であるということがいえるのであります。成仏を度外視して、仏や貫主や、血脈、戒旦を論じても、それはまったく題目から遊離した不毛の議論であり、成仏すべき一切衆生には、有害で邪魔なものでしかないのであります。

「一切衆生成仏」このことをキーポイントとして、日蓮大聖人の御法門を拝して行く時に、総ての役割が何かという位置が見えてくるのであります。

## 三、血脈法水の源とは何か

久遠元初の法とは、一切衆生は、仏となることが出来

るという法のことであり、この法は、人類の発生の有無に関係なく、森羅万象と共に本然として存在して来ている法なのであります。それを、仏は妙法蓮華経と説示されているのであります。

仏の本来あるがままの姿を「無作」と言いますが、繕わない、名聞名利に働かないという無作の意味は、自然ということであり、全ての生命、物質は、もともとあるがままの自然を道理として生きて来たのであります。つまり「無作」があたり前の状態であったのであります。欲望のあるがままではなく、妙法蓮華経の法にあるがままを「無作」というのであります。

ですから、妙法蓮華経は、人間界だけを対照にして、その存在があるのではなく、森羅万象に存在する事物の全てに悉有仏性としてそなわっている、そのものを説いているのであります。しかし、この森羅万象の事物の中で、一番にこの妙法蓮華経の道理から外れ、迷っている事物は何かといえば、人間であります。その点についていえば、妙法蓮華経は人間界への慈悲を色濃く持っているのであります。人類の発生に関係無く、山川草木の自然は、もともと自然の道理の中で生きているわけで、名聞名利に迷う必要もないわけですから、そこに法を説示する必要はないのであります。しかし、ここに人間が凡智と共に、妙法蓮華経から外れる迷いを持ち、畜生と化して行くことによって、仏が現われ、妙法蓮華経を説示する必要が生まれてくるのであります。

しかし、今日の衆生は、仏を尊敬するあまりに、原始人が動物と同様に生きていたような時代であっても、まるで仏は、人類の発達史とは無関係に、智識と人格を持ち、高貴で悟りを持ち、一切衆生を慈愛の眼で見守っていたように思い込み、それが無始の古仏であると考えている人々がたくさんいますが、無始の古仏という、一人の人格化されたものが経文に説かれているのではなく

「観心本尊抄」（全247P）

我等が己心の釈尊は五百塵点乃至所顕の三身にして無始の古仏なり、経に云く「我本菩薩の道を行じて、成ぜし所の寿命今猶未だ尽きず、復上の数に倍せり」等云々、我等が己心の菩薩等なり

無始の古仏とは、始めの無い永遠ということであります。そしてこの無始の古仏は、久遠元初ともいわれるのであります。久遠元初の元初というと、永遠でなく出発点である様にイメージし、無始というと出発点のない永遠とイメージするというのは、大変な矛盾であります。

そして、この御文には、「我等が己心の菩薩等なり」と、加えて、仏だけが無始ではなく、己心の菩薩も同様に無始、永遠であるのであります。つまりこの無始の古仏とは、法のあるがまま、人法一箇の、自然に一体化した存在を示していると言えるのであります。つまりそこに、仏法の源があるということであります。

「崇峻天皇御書」（全1174P）

教主釈尊の出世の本懐は人の振舞にて候けるぞ

とありますが、もちろんこの振舞いとは、前に「無作」の所で書いた様に、欲望にまみれた人間の振舞いではなく、久遠元初無始の妙法蓮華経、人法一箇の振舞。このことを一切衆生に示すことを、釈尊は出世の本懐としたということなのであります。

そうして見ると、

「上野殿御返事」（全1544P）

仏はいみじといえども法華経に対しまいらせ候へば螢火と日月との勝劣、天と地との高下なり、仏を供養して、かかる功徳あり、いわうや法華経をや

「乗明聖人御返事」（全1012P）

経は師なり仏は弟子なり涅槃経に云く「諸仏の師とする所は所謂法なり乃至是の様に諸仏恭敬供養す」と、

つまり、仏の出現がなくても、法は本然として存在しているのであり、仏がこの法を悟り人法一箇して、覚智出来ない衆生に身をもって説き伝える存在であるということであります。

「当体義抄」（全513P）

至理（至極の道理、一切諸法の根本となる真理、いいかえれば久遠元初無始の法）は名無し聖人理を観じて万物に名を付くる時、因果俱時、不思議の一法之れ有り之を名けて妙法蓮華経と為す此の妙法蓮華の一法に十界三千の諸法を具足して闕減無し之を修行する者は仏因仏果同時に之を得るなり、聖人此の法を師と為して修行覚道し給えば妙因妙果俱時に感得し給うが故に妙覚果満の如来と成り給いしなり

この御文は、このことを示しているのであります。

衆生は説き伝えられ縁して（下種）はじめて我が身にそなわっている法に気付くのであります。気付かないものは、眼の前にあっても無いと同じであります。昭和二十七年、大賀一郎博士が千葉県検見川遺跡から二千年前の古代ハスの種を発見して、発芽させ華を咲かせ、世間の耳目を集めたことは、今日でも有名な話しですが、考えて見ると、どれだけ種があっても、条件が揃わなけれ

ば、種は無に等しいのであります。下種とは、種を植える、種を授けるというイメージでとらえられますが、そうではなく潜在する仏の生命を、自覚せしめることをいうのであります。

つまり、久遠元初無始の法は、悠久の過去から流れ来たるものではなく、森羅万象の事物に、悉有仏性、本然としてそなわっているものなのであり、一切衆生個々が仏となる資質、つまり己心の仏界、己心の本尊として持つものであり。その法は、久遠即末法として時間や空間に束縛されることのない法なのであります。

真理には、古いも新しいも、大きいも小さいも、生も死も、男も女も、上も下も、仏も凡夫も、一切の差別区別の無い、時間、空間に拘束されないものなのであります。このことは、久遠即末法と同様に、仏が不滅の滅を表わし、「常住此説法　我常住於此」と表現されることも、同じなのであります。

そして、一切の仏においても、

「秋元御書」（全1072P）

三世十方の仏は必ず妙法蓮華経の五字を種として仏になり給えり

として、一切の諸仏諸菩薩が仏となった法の源も妙法蓮華経であることを示されているのであります。

雨水の様に、場所によって差別のある降り方ではなく、久遠元初の法は地下水の様に平等に潤すものと説明される方もいますが、地下水よりも、全ての生命に、生命あるものに必ずある。本然としてそなわっていながら、迷いによって忘却されてしまっているもの。有るのに無いと考えられているもの。それこそが久遠元初無始の妙法蓮華経であるわけであります。

しかし、本然としてそなわっているだけでは、天台の六即でたて分けると、理即（理の上では仏性をそなえているが、いまだ正法を聞いていない迷いの凡夫）であり、妙法蓮華経の真理と一体であっても、そこには成仏を遂げるだけの信のないもの、法と共に存在していながら、法の存在が分らない、自身が永遠常住の仏と同等の生命の尊貴に値いするということを知らず、反対に自身の尊貴を否定することになってしまうのであります。（法華経の「衣裏繋珠の譬」や「髻中明珠の譬」「良医病子の譬」はこのことを示しているのであります）本然として法のもとに生きていながら、法を知らない。大聖人が示される、

「悟るを仏、迷うを凡夫」

とは、その点を指しているのであります。

日蓮大聖人は、この理即の一つ上の名字即（はじめて正法を聞き、正法を信ずる位）に信を立てることによって、自身の仏性、仏種を言葉（妙法蓮華経）を通して知る。又、妙法蓮華経に縁することによって必ず妙覚に致ることが出来る。悪人、女人、畜生、二乗の成仏、歴劫修行の否定、一切衆生が平等に、成仏することが出来る。名字即に妙法蓮華経の信を立てることによって、金剛宝器戒として、永遠に破ることの出来ない、成仏の道を得るのであります。理即の上に立てた空論が『本覚思想』であり大聖人はあくまで名字に妙覚を立てる法門であり本覚思想との混同混乱ではないのであります。

それでは、禅宗の独悟の世界と同じではないかと、筋違いな指摘をする人がいるかもしれませんが、摩訶止観第五に指摘される様な「盲跛の師徒」と大聖人の師弟一箇の法門とは源も、プロセスもまったく違うのであります。

「法華初心成仏抄」（全552P）

とてもかくとも法華経を強いて説き聞かすべし、信ぜん人は仏にふるべし謗ぜん者は毒鼓の縁となって仏になるべきなり、何にとしても仏の種は法華経より外になきなり。

縁だけでなく、即座に信を立て、不軽菩薩の行の道に連なり、法華経の行者として、修行、弘道に志を立てれば、即身成仏であります。

つまり、名字即に信を立てるとは、法華経の行者には、精進という、修行が必要不可欠であるということを同時に示しているのであります。

※己心とは、元来、他心（他人の心）に対する言葉として表現されるのでありますが、

「止観輔行伝弘決」（巻二の一）

一切の諸仏は己心は仏心と異ならずと観ずるに由るが故に仏に成ることを得る

と示され、己心とは仏心であり、成仏とは自分の生命が仏であると悟ることであると示されています。

そうすると、己心とは、ただの自分の心という意味ではなく、心の中の心、心の核を言うのであります。りんごの果実でたとえると、私達人間は、りんごは食べる為の果肉の部分をりんごと思っていますが、りんごからすると、りんごは種をもって子孫を残そうとする、その種自身が、りんごのエキスであり、目的ということにふります。この種は悠久の過去と未来とを内蔵し、現在に存

在しているわけであります。果肉は現世だけではてるものになります。

心にも表面的な、好きだ嫌いだの類から自分でも把むことの出来ない心層の部分まであります。この種の部分は、時空を超えて、無限の可能性を秘めているのであります。心の中の心、心の核、りんごの種にたとえていえば、己心とは、そういうものなのであります。我々にとって己心とは、久遠元初無始の法ということであります。

## 四、血脈の中における大聖人の位置

それでは、日蓮大聖人の存在は何かといえば、この血脈法水の源である。久遠元初無始の法を、妙法蓮華経として、法華経の文底より取り出し、人法一箇の不軽菩薩の跡を継ぐ者として妙法蓮華経の身読をもって、人法一箇の成仏の姿を、末法一切衆生に、手本として示された仏であります。

釈尊は、法華経を説法しても、法華経の身読はされず。法華経（妙法蓮華経）の身読は日蓮大聖人をして、最初で最後、未曽有のことなのであります。この点から、久遠元初本因妙の教主と拝し、勤行の時の観念品も、本尊の観念として法を表わし、日蓮大聖人の観念として仏を別々に表わしているのであります。

日蓮大聖人が、三国四師と、釈尊、天台、伝教、日蓮の系譜を示されるのも、四師内証の最要の法は、妙法蓮華経の一言であることを示しているのであります。

日蓮大聖人の振舞いがなければ、久遠元初無始の法を一切衆生は知ることが出来ず、一切衆生成仏イコウル広室流布は、法華経の嘘言となってしまうのであります。

「もし地獄に墜ちた時、某（日蓮）を怨むな――」

との日蓮大聖人の教示からいえば、日蓮大聖人が私達を成仏させてくれるわけでも、日蓮大聖人が地獄に墜すわけでもないのであります。

久遠元初無始の法を悟り、身読の生き方をし、妙法を貫き、この様に生きることが成仏ですよ。――このことを久遠から末法に至る迄、未曽有、唯一の手本として、己心の仏界を凡夫に分る様に示してくれた御方が、日蓮大聖人なのであります。

「法華初心成仏抄」（全557P）

我が己心の妙法蓮華経を本尊とあがめ奉りて我が己心中の仏性、南無妙法蓮華経とよびよばれて顕れ給う処を仏とは云うなり、譬えば籠の中の鳥なけば、空とぶ鳥のよばれて集まるが如し、空とぶ鳥の集まれば籠の